



装備製作系

チートで

異世界を自由に

生きていきます

12

Author: tera

Illustration: ふらすこ



ジュノー

ダンジョンコア。
パンケーキが大好き。
かなりの天然系。



マイヤー・ アルバート

アルバート商会の令嬢。
20歳。損得勘定で動く
生粋の商売人。
世話焼きな一面もある。



オスロー

アーティファクト
研究科の学生。
空飛ぶ魔導機器の
開発を目指す。



イグニール

冒険者の女性。24歳。
強力な炎の魔法を操る。
母の形見の杖を愛用する。



トウジ(秋野冬至)

あきの どう じ
本編の主人公。30歳。
元フリーターで異世界召喚に
巻き込まれる。
ネーミングセンスが適当。



ポチ

コボルト。
トウジのサモンモンスター。
毛並みが良くコボルト界では
イケメン。

登場人物紹介

MAIN CHARACTERS

第一章 指名依頼はなんと先生？

さて、黄金樽おうごんだるの美酒を巡びってみんなで大騒おほさわぎした夜の翌日である。

「トウジさんトウジさん！ 依頼ですよ、依頼っ！」

ポチと二人で冒険者ギルドへ顔を出すと、まるで待っていましたとばかりに受付のエリナがズイッと顔を寄せてきた。

「きゅ、急になんですか？」

美人な受付嬢なのだが、この桃色の髪には未だに抵抗感がある。

そんな俺の心持ちなんて知らないとはかりに、彼女は首を傾かたむけて言った。

「あれ？ 今日はいグニールさんやゴレオちゃんはいらっしゃらないんですね？」

「あー……二日酔ふつかよいでダウンしてて、ゴレオはその看病かんびやうですよ」

エリナの言う通り、いつもならみんなでギルドを訪れるのだが、先日彼女たちは酒で大失敗していたため、今日一日は自戒じかいの日として大人しく家で過ごすらしい。

まあ、二日酔いだから動けないって感じ。

「二日酔いですか？ 珍しいですね、生真面目そうなのに」

「人間、そういう時もありますよ。ウインストと再会した祝いの席でしたから」

「あゝ、なるほど祝いの席ですか！ でもトウジさんは平気そうですね？」

「酒を飲む時はセーブしてますから」

適当に答えちゃいるが、実際はセーブできませんでした。

イグニールにチューされ、パンツ一丁で外に出て、オーガと戦って。

うん、振り返るだけでも羽目外しまくりでヤバイ。

「トウジさんって酔ったら、どんな風になるんです？」

「普通ですよ、普通」

上目遣い^{うわめづか}のエリナの問い掛けに言葉を返すと、ポチが溜息を吐いていた。

どこが普通なんだ、みたいな感じで。うるさいぞ。

「へー……でもそういう人こそ飲んだら、結構変わるって言いますよねー」

ギクギク。これ以上この話をするとかポチが出かねないので話題を変えよう。

「ところで依頼ってなんですか、依頼って」

「はい！ よくぞ聞いてくださいました！」

聞いてくださいましたって、絡んできたのはそっちだろうに。

どこの支部の受付も、なんかガンガンに絡んでくるよなあ……。

「トウジさんに指名依頼なんです！」

「指名……？」

なんとも面倒くさそうな、そのワードに少し構えていると、エリナは言う。

「トウジさんが指名依頼を受けたがらないのは知ってますので、安心してください」

「は、はあ……」

「この依頼は別に危険でもなんでもなく、かつ高収入！ そんな依頼なのです！」

「ええ……？」

つまりローリスクでハイリターンな依頼、明らかに危険な香りがした。

「そう構えないでくださいよ、依頼元もしつかりしたところなんですから」

「どこからですか？」

確かに依頼元の信用性が高ければ、ローリスクハイリターンな依頼というのも理解できる。

「なんと、あのソレイル王立総合学院^{おうりつぎょうがくえん}です！ 前にトウジさんがオーガから助けた学生さんがいた

じゃないですか？ あの子たちが通う学院です！」

ソレイル王立総合学院。マイヤー、オスロー、ライデンの三人が通う学びの園^{ぞの}。

アーティファクト研究に強い有名校の一つである。

「なんでまたそんなところから？ 遠出の護衛^{ごえい}か何かですか？」

一度オーガから助けたこともあるし、学校行事の護衛でも頼まれるのだろうか。

しかし、エリナは首を横に振って言う。

「違いますよ？ 危険はないと先ほども言いましたよね？ ふっふっふ！」
うざい。

「なんとですね！」

「——エリナ君ッ！」

「はひっ!？」

辟易^{へきえき}していると、ドヤ顔をするエリナの横から他の男性職員がヌツと顔を出して、焦ったような表情で横槍を入れていた。

恐らく彼はエリナの上司で、彼に一喝^{いっかく}されたエリナは肩をビクツと震わせる。

「エリナ君、それはここで説明するのはダメな案件でしょう？」

「そ、そそそ、そうでした！ すいませんすいません！」

「奥に空き部屋があるから、そこ使って」

「はひっ！ ト、トウジさんこっちです！ こっちです！」

そうして俺とポチは奥の一室へと案内された。

ポチを膝に乗せてソファァーに腰を下ろし紅茶を一口、するとエリナはようやく話を仕切り直す。

「なんとですね、トウジさんには先生をしていただくのですっ！」

「せ、先生……？」

想像していた依頼内容と全然違っていて、拍子抜け^{ひょうしぬ}だった。

応接室^{おうじつしつ}に通されるレベルのロースクハイリターンな依頼だなんて、なんかとんでもないものな
んじゃないかと思うだろうに。

「トウジさん、冒険者ギルドとギリスの魔導機器^{まどうき}研究機関^{けんきゅうきかん}が協力体制を敷き始めていることは、
ご存じですよね？」

「ええ、まあ」

その協力体制とは、冒険者用の便利グッズや装備をレンタルできるサービスのことで、ギルドは
各種魔導機器メーカーと提携^{ていけい}を始めているのだ。

そこまでは一般の冒険者が知る内容、そして俺はその一つ先の話まで知っている。

それはギリスで有名な魔導機器を扱う大商会であるC・Bファクトリーの信仰^{しんこう}装備計画^{えびけいかく}のこと。
その内容はギルドと提携して無造作に配ったありとあらゆる装備から使用者の魔力をかき集め、
一つの最強の武器を作り出すというクソみたいな計画。

見立てによつてはすごく強い武器が作り出されてめっちゃいいじゃん、みたいな感じに受け取ら
れそうなのだが、魔力を吸われる側からすればとんでもない代物^{しろもの}だ。

常に魔力を吸われ続け、肝心な時に力が出せないような状況になつてしまえば、冒険者としてま
ともに依頼をこなすこともできないし、最悪、死に直結する。

もっとも、そんなクソみたいな計画は俺たちが未然に防いでいた。

「最新の魔導機器がお手軽に使えるなんてすごい話ですよー！」

裏の事情を知らずに呑気に喜ぶエリナだが、冒険者ギルド側って色々とし抜かれすぎじゃないかな、なんて思う。

俺が元々住んでいた日本には、『たどり怖いものはない』なんて言葉がある。

古今東西、たとえ別の世界でも、美味しい話はすぐに信じてはいけないものなのだ。

……オスローとオカロ親子に任せてある研究機関が大きくなったら、どうにかしてギルドの協力先の研究機関を鞍替えできないか聞いてみよう。

信仰装備計画自体は完璧に潰したとは言えないんだ。

あくまで俺がやったことは遅延行為であって、C・Bファクトリーが使用者の魔力を集めている大規模バッテリーに魔力がチャージできていないことがバレたら、また計画は再開されるだろう。

その時まで発言力のある立場、つまりSランクの冒険者くらいにはなっておかなければ。

そう考えると、嫌でも指名依頼は受けなきゃいけないんだらうなあ……。

「トウジさん聞いてます？」

「あ、はい聞いてます、なんですか？」

ぼんやり考えているとエリナがジト目で俺を現実に戻す。

「実はそうした繋がりで、我が冒険者ギルドも、ついに生え抜きの存在を育てる試みが始まったんですよー！」

「生え抜き……つまり冒険者科的なものを学院に作るということ……？」

「その通り！ まだまだ模索段階なのですが、私たちも所属する冒険者の死亡率を下げるために頑張っているのです！」

「へえー、でも士官学校とかと被らないんですか、それ？」

冒険者ギルドなんて、学校に行つてまで入るもんじゃ無いと思うんだけどなあ。

元々平和な世界で暮らしていた俺は、アニメや漫画の影響で何となくワクワクする職業に感じるものだが、この世界では特にそうでもない。

魔物の存在は恐ろしい、さらに魔物以外にも良からぬ考えを抱く野蛮な連中も多くなって危険なんだ。お金に余裕がある人は自ら学んで頭を使う仕事をするし、家業を持つならそれを継ぐのが一番いいのが常識である。

冒険者ってぶっちゃけ何も無い人が仕方なくやるものか、一攫千金を夢見て一旗立てたい酔狂な奴がやるものなのだ。

「まあ、ある意味では隙間産業みたいなものですよ、冒険者ギルドって……」

薄らとそんな事情をわかっているのか、エリナも露骨にテンションを下げて溜息を吐きながらそう話す。

「みたいなものっていうか、隙間産業でしょ」

「それを理解してるトウジさんは、本当に良い冒険者ですね」

「どうも」

「ワフ……」

褒め言葉なので真摯に受け止めると、ポチが溜息を吐いていた。

なんだって？ 良い冒険者だったら指名依頼や他の面倒なことを拒否しないだって？

平気で一か月くらい依頼を受けずに遠出するし、どっちかと言えば無責任だって？

うるさいぞ、褒められてるんだから素直に受け取ってこよう。

「トウジさん、話を続けますね？」

「はい」

ポチの頭を乱暴に撫で散らかしていると、エリナが話を戻した。

「冒険者の学科を作って生え抜きを育てるというのも一つの目的なんですけど、実はこの他にも色々と込み合った事情があるんですよ」

エリナはすでに揃った書類の束をいつもの癖でトントンと無意味に机に当て続ける。

「軍と魔導機器メーカーの繋がりがあって知ってます？」

「知らないですけど、察しはつきます」

基本、世に出回ってる魔導機器は軍事目的で作られた物を一般に卸しているに過ぎない。

国家単位で魔導機器の研究を主導しているのならば、当たり前前の話だった。どの世界でもそれは常だ。

「冒険者の学科は、ある意味、その規模をものすごく小さくしたものだと思えていただければ」
「なるほど」

「研究開発をより実戦的で応用が利くような物にするために作られるらしいですよ？」
要するに学生に魔導機器を作らせて、それを学生が実際に使用するってこと。

研究者が研究したいものと実際に実務で必要なものって結構違う場面が多いから、その辺を効率的にするための仕組み作りみたいなものなのだろうかね。

士官学校と魔導機器研究が盛んな学院が密接に関わってしまうと、近隣諸国から『まさか魔導機器を兵器として利用するつもりなんじゃないだろうね？』とかいちゃもんをつけられかねない。

そんないちゃもんを回避するために中立機関である冒険者ギルドを間に入れて基礎教育みたいなことをするのだ。

士官学校向けに戦うための魔導機器を作るより、冒険者ギルドとの結びつきを強めた方が『あくまで魔物対策ですよ』と言い張ることができるからね。

それが方便だったとしても最新の技術を用いた冒険者向けの便利グッズは、技術を持たない他国にとっては利益にもつながるのだし、表立って文句は言われないうらう。

ぶっちゃけ先に魔導機器メーカーと組んで勇者の武器を作ろうとした奴らがいるのだから、国が先んじて手を打ったのだらうと察した。

「補助金もあったりして、こっちにも旨味はあるんですけど……」

諸々の事情を知っているのか、少し複雑で悲しい表情をするエリナは、相変わらず綺麗にまとまった書類をトントンしながら言葉を続ける。

「学生に武器や装備を作らせて、しかもそれを学生に使わせて、最終的に軍に……って、なんだかとても嫌な感じがしませんか？」

「そうですね」

便利グッズの他に、学生たちが魔物を倒すために武器や装備を作ったとする。それが軍事利用される可能性を考えたら、ごっこ遊びにしては度が過ぎているんじゃないかと、俺も思った。

しかし国が決めたことに文句はつけられないので、どうすることもできないのである。エリナと一緒に溜息を吐いていると、彼女は俺が指名依頼を受けに来た冒険者だということを忘れたのかと言わんばかりに愚痴る。

「なんか大陸の国では、ちよつとバチバチ出してるし……」

トントントントントントン。

「それでこのギルドに流れてくる冒険者も増えて、治安もちよつと悪くなってるし……」

トントントントントントン。

「同時に魔物の被害もそこそ増えてきてるし……」

トントントントントントン。

「あの……そのトントンやめてもらっていいですか……？」

「あつすいません。癖なんです」

書類をトントンし続けるのが癖だなんて隣で仕事する人はノイローゼになりそうだな。

「まあ誰にでもありますからね、癖なんて」

「よかつた、やつぱり普通ですよね？」

普通かどうかは知らないけど、俺もダメだとわかりながらついやってしまう癖があるので、ただ人のことを言えないだけだった。

「隣の受付の同僚に頭がおかしくなるから止めるって、よく言われるんですけど、不安になるとついやつちゃうんですよ」

「……マジかよ」

もうノイローゼになってる奴がいた。可哀想。

「ま、まあ別に作るものって、武器だけに限った話じゃないでしょう？」

とにかく話を戻すことにしよう。なんだか長くなりそうだし。

「おっしゃる通りです、便利グッズに留まるなら何の不安もないんですけど……」

トント——

「うぐつ、また不安でトントンしちゃいそうに……」

「苦しそうにするくらいなら、自由にトントンどうぞ……」

「はいっ！ ありがとうございます！ さすがトウジさん、懐が深いですね！」

「まあ、それはそうかもですね」

なんとも言えない俺の表情を察したのか、エリナは次々と説明を続ける。

「聞くところによると、一人の生徒が強くトウジさんを希望したそうですよ？」

「生徒……？」

俺のことを知る生徒と言えば、ライデンか？ ライデンだな！

「それにそれに、今の時期はオススメですよ！ ソレイル、今年の宿泊学習は今話題のダンジョンリゾートに行くみたいで！ トウジさんたちパーティーは、教師としてそこへの同行も認められるのです！」

「だ、ダンジョンリゾート……？」

「はい！ 極彩諸島の島の一部を大胆に使ったリゾートがあるんですよ！」

とんでもない響きのその言葉に首を傾げていると、エリナはどこからともなく取り出したパンフレットを片手に、身を乗り出して豪語する。

「見てくださいこれ！ ダンジョンをリゾートだなんてすごいですよね？ いいなあ、年中泳げる海とか、晴れ確定の天気とか、常夏を体験できる本場にすごい場所なんですよ！ いいなあ！ 特別入島許可証がないと、私みたいな庶民は絶対に入れないリゾートなんですよ、そこ！」

「はあ……」

あまりにも目を輝かせて話すもんだから、リゾートって言ってもぶっちゃけダンジョンだろ、

とは言えなかった。

俺の経験則から言うとなんが起るか分からないのがダンジョンで、基本的に支配域はその全域で余計な行動は許されない。

まあでもダンジョンコアと取り引きでもしてるんだろな、と俺は結論付ける。

俺だって、ダンジョンをリゾートじゃなくて、マイホームとして利用してしまっているのだから、人のことをとやかく言えないのだった。

「まあ気軽に引っちゃってくださいよー」

俺の歯切れの悪い言葉やなんとも言えない表情を察したのか、エリナはどうか取り繕おうと言葉を紡ぐ。

「今回は別にお堅い授業をしろとかそういう話ではなくて、本音は学生に冒険者という職業を教えるべきか、それを確認していただくお仕事なのですから」

エリナの言いつ分的には、学生に冒険者って何かを教えながらリゾート施設でバカンスを楽しめる依頼らしい。

余りにも美味しすぎる内容に、きな臭い部分を感じるのだが、それなりに自由も許されているみたいなので宝くじに当たったと思うことにしようか。

「そこまで推していただけるのなら、とりあえずお受けします」

「やったあ！」

依頼を受ける旨を伝えるとエリナはガッツポーズをとっていた。

「そう言っていただけで嬉しいです！ むふふ、これで私も冒険者ギルドのリゾート支部に担当受付として、トウジさんの補佐役で行けるんですよー！ やったー！」

「それが本音ッスか……」

「ある意味そうですね！ この話を聞いてトウジさんなら絶対に受けてくれると踏んでました！ ああ、常夏の実、実はビーチに行ったことがないので、すごく楽しみです！」

「アオン……」

このエリナの職権乱用^{しつぽんらんよう}っぷりに、ポチは俺以上にどうしようもない奴を見つけたとばかりの表情をしていた。

まあポチ、落ち着くんた、不安にならなかつたらトントン地獄は発生しないのだし。

それに言葉をそのままに受け取れば、冒険者の基本的なことを教えて、あとは生徒と一緒にリゾート施設で遊んでいれば2000万なんだ。

圧倒的好条件の依頼として楽しもう。

「ちなみにそのリゾート施設って、なんて名前なんですか？」

「その名もダンジョンリゾート・オデッセイです！ パンフレットいります？」

「一応貰っておきます」

引率^{いんしつ}をするのなら、パンフレットがないと何かと不便なので貰っておこうか。

きな臭さがブンブンしていた依頼だったが、パンフレット一つでなんだかワクワクしてしまう俺がいる。

「では暇でしたら、すぐにお越しいただきたいそうなので、さっそくお願いしますね」

「え、あっはい」

これから依頼の細かな内容やら日程決めをするのかと思いきや、即日に来てほしいと言われたので、さっそくポチを連れて移動することにした。

冒険者ギルドで話した内容は結局リゾート施設がすごいってことくらいしか覚えてない。

職権乱用どころか、もはや受付として怠慢^{たいまん}だろ。

「なんだかんだ学校に行くのも久々だな、ポチ」

「アオン」

冒険者ギルドを出てポチにそう語りかける。

頷くポチを見ると、なんだかこうして二人で行動するのも久々に感じた。

最初にいた国であるデブリから次の国のトガルに到着するまでは、ずっと傍にポチがいてくれた。命の危機を感じて召喚した時から、ポチがずっと俺の隣にいるのはもう確定事項。

世界がどれだけ変わろうとも唯一変わらないことの一つなのである。

異世界に一人、俺みたいな異物、そんな環境の中でどれだけ安心させられたことか。

「ポチほら、抱っこしてやる」

「アオン……？」

いきなりなんだ、と目を細めるポチだが、満更でもなさそうだった。抱っこする俺の胸に体重を預けてくれるこのもふもふよ。

「そうだ、今回の依頼は俺たち二人で行くか」

「アオン？」

「みんな一緒になくていいのだった？」

俺も最初はそう考えていたが、最近は大勢で色々な所を飛び回りすぎてる気がする。

行っても面倒ごと、帰ってきて面倒ごと、そんなことが多い気がするので、みんなにはゆっくりする時間が必要なんじゃないかと思っている。

教壇に立って冒険者について教えるにしても、あくまで基本的なことを教えたり体験させたりするだけなので、全員で行っても仕方がない。

「休息は必要だよな？ それに今は飛空船ひくうせんの製作に忙しいし」

「オン」

「寄り道しながらけど、そろそろそっちにも本腰入れないとな？ それに、完成したら好きなだけ遠出ができるようになるんだぞ」

「アオン！」

遠出の苦勞を知るポチは嬉しそうにしていた。

そう、遠出は飛空船ができてから！

いつまでもワシタカくんの足にスッポリ収まっているわけにもいかないのだ。

それまではギリス国内でできる依頼を済ませておこう。

オスローたちから製作に必要な素材のヒヒロカネの追加注文が入るかもしれないし、C・Bファクトリーの動きも注意深く見ておかなきゃいけないのだ。

別に正義の味方を気取るつもりはないが、敵対勢力の動きによって俺と近い間柄あいだがらの人たちに迷惑が掛かるのは許せないのである。

再三言うけど、平和を守るつもりはさらさらない。

ただ敵の悪意が俺たちにまで届かないように、阻止したり邪魔したりするだけなのである。



「さて、着いたな」

「オン」

俺はポチを抱っこしたままソレイル王立総合学院の門をくぐり抜けた。

「お久しぶりですねトウジさん、今日はどうしました？」

すぐ警備の人に呼び止められるのだが、何度か学院には顔を出しているし、すっかり顔見知りと



いった感じだ。

「お久しぶりです、依頼ですよ」

挨拶を返しつつ、ギルドから発行された許可証を提示する。

「ああ、聞いてますよ。課外授業に冒険者の方を呼ぶと。トウジさんでしたか」

「これから一か月ほどよろしくお願いします」

「一か月も！ 長いですね？」

「それだけ気合いが入ってるんじゃないですか？」

詳しい話は学院で聞けるそうなので、何をするのかその時にしっかり把握しよう。

決して安くはない金額を提示されているし、ばっちり役目をこなすのだ。

「そうだ、これ差し入れます」

俺は適当な世間話をしつつ、警備の人にインベントリから取り出した串焼きを渡す。

これから一か月も顔を合わせることになるのだから、このくらいはしておこうか。

それに教職員の中で俺だけ冒険者というアウェーな環境に身を置くことにもなるので、味方を

作っておかないと怖いのである。

「トウジさん、いいのかい？」

「ええ、これからよろしくお願いします」

「おおっ！ なら警備のみんなで食べることにするよ、ありがとう！」

「どういたしまして」

「何か困ったことがあれば、相談してくれ」

「はい、お気遣いありがとうございます」

そんな感じでこやかに手を振りつつ、俺は学院の敷地内へと進んでいく。

「相変わらずデカイ学院だよなあ」

「アオン」

ソレイル王立総合学院はギリス屈指の学び舎ということもあって、校舎まで噴水付きの芝生公園を抜けていかなければいけない。

道に敷かれる煉瓦の一つ一つがなんとも高級そうで由緒ある雰囲気醸し出している。

貧乏性だからこういう雰囲気にはじびりがちな俺だけど、もう何度か足を運んでいるので特にキョドることもなく普通に過ごせた。

最初の頃はキョロキョロしまくって、中庭にいる生徒たちから笑われたな。

「ポチ、確か着いたらアシュレイ先生を探せばいいんだっけ」

「ワフ」

俺の問い掛けにポチが頷く。

アシュレイ先生とは、オーガを倒した時に近くにいた先生の一人で、眼鏡をかけた若い女性だったのを覚えていた。

その先生が詳しい業務内容や施設案内をしてくれるそうなのだが……。

「あれ、職員室どこだっけ……」

肝心の職員室の場所がわからなかった。

「アオン……」

そのくらい確認しろとばかりに溜息を吐くポチではあるが安心してほしい。

俺にはマップ機能があるのだ。

マップを校舎限定にすれば、どこに何があるかなんて一瞬でわかるんだぜ。

「ええと、ここを抜けて……」

「どうしましたー？」

職員室の場所を探してマップを見ていると、迷ってる人だと思われたのか、唐突に後ろから声をかけられた。

振り返るとまず目についたのは、風にたなびく金髪とインナーカラーの明るい紫。

加えて着崩された女子用の制服には、一目でギャルっぽいなという感想を覚えた。当然、この異世界にギャルなんて概念が存在するはずもないのだが、目の前にいる女子学生のセンスは、俺の元居た世界のギャルと酷似している。

「いや、職員室どこだっけって思ってた」

「職員室はそのまま真っ直ぐじゃん？」

方角を指差しながら教えてくれる女子生徒、言葉遣いもギャルっぽい。

丁度マツプを確認すると、合っていたので素直にお礼を述べておく。

「ありが——」

「あつ、その子つてもしかしてコボルトく!?」

お礼を述べる前に、女子生徒はポチを見て目を輝かせていた。

ふわああ、と羨望の眼差しを向け続けているので、気を利かせて聞いてみる。

「……抱っこする?」

「えっ! ヤバツ! いいの!?」

「まあ、ポチがいいって言うならだけど……どうするポチ?」

「アオン」

仕方ないなどばかりに、ポチは俺の腕から降りて、てちてちと歩き、女子生徒の目の前で万歳する。久しぶりに見ることができた抱っこどうぞの万歳だ、かわいいなあポチ。

「きゃあ〜! かわいいかわいい! マジヤバたん! マジヤバたん!」

「オ、オン……」

ポチを抱き上げて猛烈な勢いで頬ずりして、ポチを振り回す女子生徒。

マジヤバたん……? 俺の耳にはそう聞こえてきたのだが、それはどんな感じなんだろうな?

マイヤーの関西弁みたいな言葉もそうだし、自動翻訳は不思議すぎる。

ちなみに、文字に関しても自動翻訳で何故か意味がわかってしまうという仕様。

書類にサインする時だって、手紙を出す時だって、頭の中にある日本語をこの世界の文字で書くとしたら不思議とスラスラ書けてしまうのだ。自動翻訳、マジヤバたん。

「はああ可愛い可愛いヤバたんヤバたん」

ポチを抱きしめて匂いを嗅いで一心不乱に小躍りする女子学生。

それを見てふと思うた。

俺がポチに変身して学院の公園に行ったら、いったいどんなパラダイスになるのか。

ポチの可愛さは年頃の女の子に効果抜群だ。

こんな風に、若い女の子に揉みくちにされちゃったりしちゃうのかな?

どうする? やる? どうなる? つかまる?

うーん、うーん、うーん……バレたら後が怖いので、やめておきましょう。

イグニールはすでに変身する秘薬の存在を知っているのだ。

勘の鋭い彼女のことだ、コボルトがポチ以外にもう一匹いたら、その正体に気がつくだろう。

洗脳系の特殊能力と同じで、日頃から乱用するのは使用者の信用問題に関わってくるんだ。

大人として節度を保つことは、これから先の人生において無用なカルマを増やさぬための最も重要な裸の一つなのである。

「ねえ、このコボルトの名前なんていうの?」

「ポチ」

「ヤバッ！ 可愛い名前！ ヤバ感激っ！」

「アオン……」

別にヤバくないだろ普通だろ、とポチが呆れながらツツコミを入れていた。

でも俺はポチって名前はえぐいくらい可愛いと思うけどなあ。

「ポチって何食べんの？ 蟻とか？ 草？ これ食う？」

「いや雑草は食べないよ」

「ええー！ どうしよ、餌あげてみたいじゃん、こんなに可愛いんだし」

「わかる」

「わかるっしょ？」

おじさんおばさんが孫や甥っ子に飴を渡す感覚なんだろうね、こういうの。

ちなみにコボルトは雑食の部類なので、雑草も食べようと思えば食べられる。

ただ、ポチは料理ができるので自分の食べたいものを作って食べるのだ。

むしろ料理を覚えてからは、そこの人間よりもグルメなコボルトと化している。

逆に俺たちが餌付けされるレベル。

「君は怖くないの？ 一応、人も襲う魔物だけど」

「従魔じゆうまでしょ？ だったらマジ平気ー！」

ペット感覚で弱い魔物を従魔にするのはサルトの町でも流行っていたし、たまに冒険者が連れ歩いているのでその認識は間違っちゃいない。しかし、さすがにこうして抱きしめて振り回すような真似をされたことはあまりない。

「つーか、ポチって聞いたことあるコボルトのイメージと違うし、大丈夫かなって？ なんだか

ふつくらもふもふしてて、すつこく可愛いし」

「わかる」

「わかるっしょ？」

自然界にいるコボルトと違って日常的に食べているものが良く、栄養状態はそのまま毛並みの質に直結しているから、当然のことなのだ。

特にポチは料理に自分の毛が入らないように常にグルーミングを欠かさないので、ふわっふわでもつふもふなのである。

つまり努力の賜物たまものでもあるのだよ！

「自分で毎日キレイキレイしてるもんな？ ポチ？」

「ふんす」

ポチも自慢に思っていたのか、女子学生の腕の中でえんと胸を張っていた。それがもう愛らしかったようで、さらに揉みくちやに抱かれている。

「これもうさ、ただのコボルトじゃないじゃん？」

「そうだよ、ポチはスーパー有能コボルトだよ」

「へー！ 可愛くて有能とか、ポチ、ヤバいじゃん？」

「ヤバいよ」

偏差値だだ下がりの会話だが、ノリで会話するのも悪くない。

俺は学校とかあんまり興味なかったし、溶け込めたことなかったけど、もしかして今溶け込めちゃってたりする？

——キーンコーンカーンコーン。

そんな会話をしていると校舎の方から鐘の音が聞こえてきた。

「あつ、ヤバ遅刻〜！ もう行かなきゃだからバイバイ！」

「あつはい」

遅刻するつてもう昼前なんだけど、まさかこの子は今頃登校してきたのだろうか。

なんか見た目も中身もそのまんまギャルって感じだな、マジヤバたん。

ポチを下ろして手ぶらで校舎へ急ぐ女子生徒は、こちらを振り返りながら言葉を投げかけた。

「つてかさ、あんたの名前なんているの？ あたしはエイミイじゃん」

「トウジだよ」

「トージね。オツケ〜！ じゃ、またポチ抱かせてね。よろび〜！」

「よ、よろび〜！」

彼女の口調に釣られるように、俺もギャルみたいな言葉を返してしまった。

ただだーっと駆けていく彼女の後姿を見てこう思う。

ヤバい、俺すでに学校が楽しくなってきた気がする、と。

まさか三十歳にもなって異世界で学校の楽しさを知るとは、ギャルにマジ感謝。

こういう陰キャにも優しいギャルがいたら、俺の学生生活も明るかったのかな？

「エイミイか、覚えておこうっと」

テンション上がってきたな、おい。

「アオン……」

それが顔に出ていたのか、ポチが呆れながら俺のふくらはぎを蹴っ飛ばしていた。

「痛っ！ やましい気持ちはまったくくないからね！ マジほんとガチ」

「オン……」

ポチの視線からだだとパンツ見えてたよな、とか断じて思っちゃいないぞ。

思っちゃいないんだからね。



「お久しぶりです、トウジさん」

「どうも」

それから職員室へ向かうと、待機していたアシュレイ先生が対応してくれた。あれから変わらず、なんとも小柄で可愛い先生だこと。

「ひとまず学院内の案内からしていきましょうか、こちらです」

「お願いします」

マップ機能は便利だが、自分の目で見て覚えておくことも重要である。もつとも、いちいちマップを開いて位置を確認するのが面倒なだけなんだけど。するとアシュレイ先生に質問される。

「……あの、右足を引きずっていますか、どうしたんですか？」

「大丈夫なので気にしないでください」

「そ、そうですか」

俺の邪な考えをポチに悟られ、蹴られたり噛まれたりした箇所である。

わりと本気で噛みつきやがって……。

「俺は何をすればいいんですか？」

そんな話はさて置いて、とりあえず歩きながら色々と尋ねることにした。

「気楽に構えておいてくれて言われて、流れで依頼を受けたんですけども」

「え？ ギルドで説明を受けてないんですか？」

「え？」

それはソレイルの先生から伝えられるんじゃないの？

エリナの奴、リゾートに行ける喜びでその辺をすっ飛ばしたのか。

「まあそれなら、校内を案内しながらご説明しますね」

「お願いします、すいせん本当に」

なんで俺が謝らないといけないのだろうか。

「いえいえ、やることは結構多いですよ。まず丁度この後に学院集会がありますので、そこで新任挨拶をやっていたきます」

「え、挨拶ですか？」

「はい、生徒への紹介だけでなく、教師が務まるのかを見ることも目的として新任の先生が来られたら毎行ってるんですよ」

マジか、冒険者について教えるだけの外部講師だと思っていたのだが、どうやら冒険者に教職が務まるかの判断もされるらしい。

ソレイル学院側からすれば、当然っちゃ当然だった。

「なんか緊張してきたな……」

「大丈夫ですよ。生徒総数は千人を超えますけど、大丈夫です」

全然大丈夫じゃない！ とんだマンモス校だな！

さすがはギリス首都随一の学校だ。

聞けば通っている生徒は、平民や貴族まで多岐にわたり、年齢層も幅広かった。

貴族も多い中で、俺みたいな一介の冒険者が挨拶をしていいものなのか？

「で、その後は事前に希望者を集めてますので、さっそく講義を行っていただきます」
早すぎだろ。

つまり今日は学院内の案内とこれから何をすればいいか聞くだけだと思っていたのに、まさかの即日講義である。

「冒険者の講義……うーん、ピンとこない……」

そもそも先生ってさ、こうやって教えてくださいよってガイドに従ってやるもんじゃないのか。

何の準備もない中で、俺みたいな素人がまともな講義をできるわけがない。

うら若き乙女と絡める役得かと思いきや、その分ストレスも多そうだ。

報酬につられて安請け合ひしてしまったことを少しだけ後悔してしまった。

なんでこう、お金になびいてしまうんだろうね、俺は。

「オン」

「ん？」

ポチから腰をちょんちょんと突かれたので視線を送ると、俗物変態野郎と書かれた板を持って立っていた。

クソが！ よくわからんタイミングで心を見透かすようなボケしやがって！

「頬つぺたぐにぐにの刑だぞ！ このこのこの！」

「アオンアオンアオンアオン！」

「ちよつとトウジさん！ ポチちゃん可哀想ですよ！ やめてあげてください！」

バシツとアシュレイ先生に怒られる。

「あ、いえこれはちよつとしたコミュニケーション的なものっていうか、その……」

「クウン」

ポチはアシュレイ先生の足元にまるで助けを求めるようにひしつと抱き着いた。
こ、こいつ。

「生徒が真似したら困ります。そういうことはお控えくださいね！」

「は、はい……」

ぐぬぬ、ぐぬぬぬぬぬぬ！ むきいー！

ま、まあいいだろう。邪な考えを最初に抱いたのは俺なのだし、今日は許す。

俺はどうにか心を落ち着かせて話を元に戻す。

「アシュレイ先生、他にやることはありますか？」

「そうですね、基本的に自分の受け持つ授業以外は定期的な校内の見回り、清掃、破損箇所の保全、各部活動の監督、また宿直なども行っていました」

「えっ!? そ、そんなに!？」

矢継ぎ早に出てくる言葉は、俺の想像していたことよりも数倍多かった。

ほとんど用務員さんがやるような仕事を俺がやるのだろうか。

「ええ、新学期になって実際にこの試みがスタートした際には、担当していただく冒険者の皆さんにそういった雑事も含めた依頼という形にしてお願いたしますので」

「マジかよ、聞いてないんですけど……」

「え、上に一応確認しておきますけど、私はそう聞いてますね」

「そ、そうなんですか……?」

「はい、冒険者の方々は元々警備や保全活動が得意だから大丈夫ですと、ギルドから回答をいただいているのです。みんなが通る道だそうで」

「ま、まあそうですね……」

冒険者は細々とした雑用依頼を続けていき、そこから護衛依頼を経て一人前となる。

ある意味でアシレイ先生の言い分は合っていた。

こんなことなら先に向こうで依頼内容をしっかり聞いておくんだった、ミスった。

いつもは詳しく聞いてから決めるのに、先生という仕事はぼんやりと知っているものであり、なおかつ町の外ではなく内側の依頼だったから油断していた。

「今から確認してきますけど」

「い、いや大丈夫です……はい……」

もう受けちゃったんだからどうしようもない。

「本当ですか? 私も結構やる人が多いなと思ってはいたんですけど。でもギルド側はトウジさんなら一人で全部できるって言ってまして、学院側もオーガから救ってくれたトウジさんでしたら、と信頼を寄せていましたので」

「なるほど……」

過剰な信頼だが、恐らくそれは俺がずっとずっと依頼を失敗することなく続けているからだろ
うな、と察する。

ギルドからの評価を稼ぐために、町の外の討伐依頼の時も毎回常設依頼になっている薬草とか鉱
石、魔物の素材をまとめて渡していたからなんだ。

ぶっちゃけ薬草や鉱石は家で採れるし、魔物の素材だって剥ぎ取ったものとは別にドロップアイ
テムとして蓄えたものをコソコソ納品してただけなんだけど。

そういったせこい手を使って得まくった評価が、代償として巡り巡って今ここでドツと押し寄せ
ているのだった。

まったく悪いことなんてしていないのに、こういうこともあるんだね。

「大丈夫ですよトウジさん! 私もサポートしますから一緒に頑張らしましょう!」

「は、はい……」

辟易している様子が顔に出ていたのか、アシュレイ先生が励ましてくれる。

まったく先が思いやられるなあ……。

「アツちゃんせんせー！　って、隣の人は誰!?　ついに彼氏できた!？」

それから業務の詳しい話を聞きながら歩いていると、鐘の音が響いてきて生徒たちが続々と廊下に姿を現した。

「アツちゃん先生、もう二十九歳だからそろそろ婚期ヤバイもんね？」

「がんばれアツちゃんせんせー！」

アシュレイ先生と俺の姿を見るや否や、生徒たちは顔をニヤニヤさせながらそう茶化す。

「ちっ、ちっち、違いますよ！　こ、この人は新しい先生です！」

「顔真つ赤だよー！　私たちは先生同士の恋、ありだと思っうー！」

「何言ってるんですかもー！　行きましようトウジさん！　食堂の場所を教えます！」

「あ、はい」

顔を真つ赤にしたアシュレイ先生に手を引かれて、足早にこの場を後にする。

うおお、これが青春か。先生視点での青春か。

それにしても二十九歳でヤバいと呼ばれる世界なんだな。結婚の時期の感覚は俺が元居た世界とあまり変わらないのかもしれない。

だったらイグニールもそろそろ考え始める頃だったりするのだろうか、気になるね。



それから俺とポチは食堂に案内され、アシュレイと一緒に食事を取り、午後一の集会にて、たくさんさんの生徒の前で挨拶をする羽目になった。

『トウジ・アキノです。Aランク冒険者です。よろしくお願いします』

音量を増幅し拡散させる魔導機器、つまるところのマイクを片手に、昼飯を食べながら考えた精一杯の無難な挨拶を披露する。

「……普通だね」

「えー、なんか地味じゃない？」

「つまんな」

「弱そ、本当にAランク？」

反応は俺の理想とは遠く離れたものだった。

とんでもない数の生徒の前で頑張って勇気を振り絞ったのに、普通だの地味だの弱そうだのつまらないだの、本音と建て前を使い分けられない純粹無垢な生徒たちの言葉は、ある意味強烈だった。

俺は大人なので、心の中で『うるさいクソガキどもが！　知らん連中への挨拶なんてだいたいこんなもんだろが！』と思うだけにする。

ウケ狙いで初っ端^{しよばな}からとんでもない自己紹介をやつてのける陽キャなんて、入学初日のオリエンテーションにしかいねえよ。

しかもウケ狙いだけでたいして面白くもなく、寒いだけで終わるんだぞ。

「ねえ、新しい先生が連れてくるコボルト可愛い？」

「うん、コボルト可愛い！」

「むしろコボルトに教えてほしいかも？ コボルト先生、めっちゃウケる！」

対して、俺の隣にただっ立っ立っ立っただけのポチは、すごい人気を集めていた。

俺の後ろをてちてちついてくるだけで、キャー。

一緒に礼をするだけで、キャー。

そして茶目っ気を出してちよつと手を振るだけでも、キャーキャーキャー。

女子学生たちの黄色い声を一身に受けており、俺は扱いの差に愕然としていた。

俺もポチになりたい。

「……ポチ、変身薬で俺とたまに代わってくんない？」

「……アオン」

それはダメに決まってるだろう、と呆れながら首を横に振るポチ。

どうして世界はこんなに生き辛いんですか。

ちなみに壇上に立った際に、社会人クラスにいるマイヤーを見つけた。

マイヤーは俺がこの場にいることに目を丸くして口をパクパクとさせていた。

「はあ……」

家に帰ったら、マイヤーに質問攻めにされるんだろなって思うと溜息が出る。

格差を感じさせる挨拶も終わり、生徒たちの授業風景を廊下から見て回る。

俺の元居た世界と変わらないような語学、数学、社会学、地理学、それに追加して魔法学や魔物学といった異世界チックな分野まで様々存在していた。

「この他にも、今後募集していく冒険者の卵さんたちには、ダンジョンについても深く学んでもらうんです。私が学生の頃はダンジョン学なんてなかったのに羨ましいです」

「ダンジョン学……？」

「ええ、魔導機器の元になったアーティファクトとは、切っても切れない縁を持つダンジョンに関する講義です！ トウジさんには、冒険者という立場で今まで見てきたダンジョンというものについて、アーティファクト研究科の生徒にお話ししていただければと思ってるのですよ」

「あー、なるほど」

アーティファクト研究をより細分化、いや専門的にしていく前段階ってことか。

今までのダンジョンは冒険者に依頼するような形で探索が進められてきたのだが、より綿密に組織的に解明していくため、こうして学科に取り入れるのだろう。

「ダンジョンについてだったら、色々行ったことありますので講義できそうです」

「おおー！ ちなみにどんなダンジョンに行かれたんですか？」

「できたばかりのダンジョンが一つと、極彩諸島、断崖凍土、深淵樹海の三つですね」

「大迷宮を三つも経験してるだなんて！ かなり有意義な講義になりそうですね！」

「そうですね？」

「そうですよ！ すごいですよ！」

三つの大迷宮に行った事実は、思った以上にアシュレイ先生の興味を引いているようだ。

「生徒は書物によって伝承にあるダンジョンの勉強をするので、実際に行ったことのある冒険者の方の話を聞ける機会なんて滅多にないんです。そもそもダンジョンアタックされる冒険者さんは少ないですし、帰ってくる人数も多くないので」

「確かにそうですね」

俺たちはのほほんとダンジョンに向かっちゃいるが、ぶっちゃけ大迷宮クラスのダンジョンは相当に危険なのだった。

深淵樹海は文字通り鬱蒼とした森で、少しでも深い場所に向かえば、そのまま迷って遭難してしまう可能性の方が高い。

極彩諸島は多少行きやすいが、一度でも船を破壊されればそのままお陀仏。

断崖凍土はそもそも環境が極限状態すぎて気軽に行けないし、比較的簡単なルートがあったとしても、やはりダンジョン内も極限状態なのだ。

マップ機能やら装備やらで簡単に難所を攻略してたから、心の中でダンジョンってこんなもんだよな、なんて思ってしまったていた。

「情報は秘匿されることも多いですし、そのような状況でいくらお金を積んでも講義に来てくれる冒険者さんなんていないんです。だからトウジさんが話を受けてくださって、本当に良かったです！」

確かに、商会や貴族の依頼でダンジョンに行ったら、そういった事情もあるか。

お宝の情報なんてある程度は秘密にしておくもの、いや、そもそも大迷宮クラスになれば内部の情報ですでに宝なんだろう。

でもなあ……。アイス食べて頭をキーンとさせてのたち回るダンジョンコアとか、ポチの弟子になってしまった料理に燃えるガーディアンとか、その情報って本当に宝なのか？

そもそもギリスの地下にせつせとダンジョンを作り続けるダンジョンコアは、パンケーキを前にすれば、なりふり構わず飛びかかってくるような奴だ。

ダンジョンってそんなにすごいものなのか、すごい疑問である。

「おっ、体育だ」

そんなことをぼんやりと考えながらふと廊下から外に目を向けると、グラウンドに生徒たちが集まっているのが見えた。

全員が同じ黒いジャージに身を包み準備運動を行っている。

「いい勉強には健康な体が不可欠ですから、運動にも力を入れてるんですよ」

「へえ、それはごもつともですね」

他の国ではまったく見なかった光景だ。

世の中が便利になって時間に余裕ができると、どの世界でも教育に力を入れ始めて元居た世界と似たような状況が作られるのだろう。

「座学が中心ですから、運動の時間はどの生徒層にもそこそこ人気ですね」

眺めているとアシュレイ先生が補足説明してくれる。

「放課後なんかは、生徒主体で集まりスポーツに励むクラブ活動もありますよ。もちろんスポーツ以外にも専門の研究を行う活動もありますし、どんなクラブがあるのかは、またその時になってからご案内いたしますね」

「助かります」

クラブ活動か、まさしく青春って感じだ。

ちなみに服装は、ブルマーではなく普通にハーフパンツである。短パンだ。

「寒くないのかな」

「エンチャントされた糸を用いた特別製なのである程度の気温なら問題ないですよ」

「さすが有名校ですね」

食堂もポチが満足そうに頷くくらいには美味しかったし、この学院は質が高い。

しかもボタンを押せば飲み物がいり捨てのコップに注がれる魔導機器まである。

さらに全ての教室に冷暖房の魔導機器が設置されており、ぶっちゃければ俺が元居た世界の学校よりも快適なんじゃないかと思ってしまった。

さすが文明の最先端に行く魔導国家ギリスである。

「あっ！ トージせんせー！」

学院の快適さに感動していると一人の女子生徒が手を振りながらこちらに駆けてきた。
間延びした口調と金髪のギャル、エイミイである。

「せんせ、新しくこの学校に来た先生だったんだ？」

「うん」

「しかも冒険者を教えるとかヤバたんじゃん？」

「ヤバいでしょ」

「講義めんどって思ったけど、せんせの授業なら受けよっかな。マジ絶対」

「それマジ？」

「うんマジマジ、絶対マジ絶対だかんね」

俺とエイミイの会話に、アシュレイ先生はぼかーんとした表情で言う。

「トウジさん、話通じてるんですか……？」

「ええ、まあたぶん？ こういうのはフィーリングですよ、フィーリング」

言葉のニュアンスはわからんわけでもない。

サモンモンスターを相手にする時なんか、だいたいこんな感じで雰囲気話しているのだ。

「フイーリングいえーい！ ポチちゃんもいえーい！」

「ワフ」

「もー、エイミィさんも授業中ですよ！ サボっちゃいけません！」

「そういえばアツちゃんせんせ、今日めっちゃお洒落しゃれしてるじゃん」

「へ？」

「マジどうしたの？ 狙ってる系？ いつもフリフリの服なんて着ないでジャージなのに」

「いやいやいや、これがいつもの私ですけど？ 何を言ってるんですか？」

「ふーん……とりま戻るから、トージせんせ、また後でね！ クラブの時！」

教師としての威厳いげんを保とうとするアシュレイ先生だが、エイミィの自由なベースに吞まれてしまっているようだった。

そうして風のように近付いてきたエイミィは、ポチをひとしきりもふもふすると、また風のように授業に戻っていった。

「自由だなあ……」

「いつもあんな感じなんです、優しくていい子なんですけどね……」

迷う俺に手を差し伸べてくれたのだから、確かに性格はいいと言える。

ただ遅刻をまるで遅刻とも思っちゃいない自由さだったが。

「ちなみにトウジさん、私はいつもこの格好ですからね？」

「え？」

「厳格な校舎でジャージなんて着ないですよ？ 本当ですからね」

「あっはい」

釘を刺されたが、大事な会議がない限りジャージでもいいんじゃないかな。

別に気にするほどでもないと思うのだが、そこは乙女の沽券こけんに関わるのだろう。

第二章 激ヤバ料理研究クラブ

——キーンコーンカーンコーン。

本日の授業が全て終了したことを告げる鐘が鳴り、学生たちはそろそろと教室を出て、予定がない者は帰り、クラブに在籍ざいせきする者は放課後の活動へと向かい始める。

「では、クラブをご案内いたしますね」

「よろしくお願いします」

あらかた学院の案内が済んだ俺は、クラブ活動を見学させてもらうことになった。

懐かしいな、何となく察しが付くと思うが、俺は高校生の時は帰宅部だった。

ネットゲにうつつを抜かしていた俺が部活なんてしているはずもなく、青春を謳歌するよりも先にまだ見ぬダンジョンや最強装備のために邁進していたのである。

ちなみに、大学生の時はそうやって捨ててしまった青春を取り戻すために、適当なサークルに入ったこともある。

高校にゲーム部なんてものはありやしないが、大学には同じ趣味を持つ仲間がチラホラいて、そんな奴らが集うサークルに入ってみたわけだ。

そんなところで青春なんて謳歌できるはずもないのに、とりあえずゲームマーな女の子がいればワンチャンあるかもみたいなところが、過去の俺の浅はかさを物語っている。

もっとも、そんな草食動物の群れにいたところで何かが起こるわけもなく、お察しの通りサークルクラッシュの存在によって、俺の青春は泡沫の夢と化したのさ。

童貞を捨てることができたのもその頃だが、あまり良い思い出ではない。
甘酸っぱいとはほど遠い、ドロドロとした感情が渦巻く黒歴史である。

「アオン」

そんな過去回想をしながら廊下を歩いていると、ポチが俺のズボンを引っ張った。
気になる教室があるようで、指さしながらジッと見つめている。

「……調理実習室？ ポチ、ここが気になるのか？」

「オーン」

「どんな設備があるのか見てみたいって？ ダメダメ、後にしような」

「アオン……」

「この時間からは料理研究クラブが活動するので、見学しても大丈夫ですよ？」

悲しそうにするポチだったが、アシュレイ先生の一言で目を輝かせていた。

料理研究クラブか、なんとも青春の香りがするので俺も見学してみたい所存である。

ポチを理由に見ることができるとのが、素晴らしい。

「たしか今は卒業製作に向けて魔物料理の研究をしてるんだとか……」

「他に行きましょう」

「アオン!？」

ヤバイワードが聞こえたので、すぐに踵を返すとふくらはぎに強烈な痛みが走る。

ポチが喰らいついていた。HP100ずつ削られていくから地味に痛いんだよな、これ……。

「グルルル、ワォン！」

「いや待て、料理は家でいつもやってるだろ？ ここでもやるってのか？」

「クウン……」

そんなに悲しそうな目をしてても無理だぞ。